

三好十郎

☆ 賢人 今昔 ☆

ソクラテスとか孔子とかはもちろん、昔の賢人たちは、自分も実行し、人も実行することの出来ることを言ってくれた。今の賢人は往々にして自分も実行しない、まして人が実行しようとすると忽ちどうしてよいかわからなくなる名言を吐くから、殺生だ。

☆ 清水 幾太郎 ☆

この賢人は「あらゆる場合に平和と再軍備反対を叫べ」とわれわれにすすめてくれる。しかし、叫ぶだけでよいのか？ その他には何もしなくてよいのか？ よければ叫びましょう。残念なのは叫んだり吠えたりするわれわれの口の奥には物にかみつくことの出来る歯が生えていることだ。

☆ 小林 秀雄 ☆

この賢人は「政治は好かん」と教えてくれる。わかるわかる。しかし選挙投票用紙に吉田茂とか鈴木茂三郎と書くかわりに「虫が好かん」とは、一寸書けない。小林自身にも多分書けまい。自分でできない事を人にすすめる賢人のことを、何とか言った？

☆ 愚者 ☆

にもかゝわらず、大衆は平和のことも再軍備のことも政治のことも、すべて先刻御承知である。かみつかなければならぬ時にはかみつくし、バカヤロウと書かなければならぬ時は書く。愚者につき心配は無用のようだ。

(昭和二十六年十月一日朝刊)

☆ 動物 第一類 ☆

この五、六年、われわれはアメリカから、だいぶお世話になった。それを素直にありがとうと言えないのは、人間として、どこかおかしい。

☆ 動物 第二類 ☆

つぎに、アメリカとさえいえば、アユとツイシヨウのシッポを千切れるように振ったり中にはひっくり返ってキャンキャン言うのまである、これまた人間として、どこか怪しい。

☆ 動物 第三類 ☆

われわれはソヴェトから、格別の世話になっっていないのに、ソヴェトとさえ言えば忽ち齒をむいて弁護するところの、吠え声の大きい種類がいる。

☆ 動物 第四類 ☆

かと思うと楽園は、そのような動物園でもある。自分が、右の四種類中のいずれに属するかを研究してみるのも、我々愚者の楽しみの一つである。

(昭和二十六年十月八日朝刊)

☆ 「異邦人」論争 ☆

広津和郎と中村光夫との根本的な違いは、中村の持っているような西洋への劣等意識が広津が持っていないというだけだ。しかしその広津も劣等意識を持っていないのだろうか？ もしかすると中村よりも深い意味で持っているからこそそれを否定するといった、つまり「骨がらみ」または「後家の頑張り」式になっている姿ではあるまいか？ いずれにせよ、西洋から「縛られて」いることにかけては、五十歩百歩だろう。

☆ P ☆

だが劣等意識も持たぬ日本人もたくさんいる。ある種のP族がそれだ。自分の全人間でもって外国人の正体をジカに知ったのである。

そして彼女らに「異邦人」を読ませると、たいがい途中で投げ出して、「カメヨなんて小説家つまらん」というようだ。

☆ 百 姓 ☆

つぎに農民がいる。これは「異邦人」など頭から読まない。だから「縛られ」ない。「近代」やアプレゲールや実存などから全く自由だ。

おもしろい事に百姓やP族はフランスのも日本のも全く似ている。ちがっているのはインテリ

ゲンチャだけだ。広津も中村も、これらの百姓やP族の前に立たせると、もう古くさいのではないか。

(昭和二十六年十月十五日朝刊)

ピカソは笑う

ピカソは画筆を握ったスポーツマンである。その作品は、彼が走りつつ作り上げて行った記録だ。「絵画」などではない。それを「絵画」を眺める眼で眺めて唸りながら「理解」しようとして立ちどまっている人々がいる。はるか向こうで、ピカソはきげんのよい子供のような嘲笑を上げる。

画家と作品と

ピカソの中に価値のあるものがあるとするれば、画家とその作品との関係を、このようにまで完全に、人とその垂れる糞との関係と同じものになしおえた事だ。人は往々にして、彼の想像力の尽きない事に驚嘆するが、何を言うやら、人は生きている間、糞を垂れないのか。

ピカソの食欲

びっくりしたり、感心したりしてよいのは、彼の作品ではなくて、このような単調なマンネリズムを繰返すことに飽きない程に生命力——ライフに対する興味の大きさと永さであろう。つまりこのように逞しい多種多様の糞をひり出し得るための食欲の旺盛さと、旺盛であり得るメト—

デに学ばばよい。

(昭和二十六年十月二十二日朝刊)

狐

日本共産党がキミンフォームから批判されたら忽ちそれまでイタケダカに言っていた事と正反對の事を言い出したのを眺めていて、ちよつと狐のオリの中を眺めているような氣持になつたことを覚えていて。

狸

今度日本共産党が左右両派にわかれて泥試合を演じているのを見てみると、小便くさい豆狸のオリを見ているような氣になる。いずれにしても人間を眺めている感じからは非常に遠い感じがする。

ムジナ

政権にありつこうとしてウロウロしている民主党の姿は、さしずめ、穴を見失つてアワを食っているムジナの姿とも言えようか。

猿

「貧乏でコメの買えない者は麦を食え」とウソぶいているような大蔵大臣などを持っている自民党は、猿に一番似ている。動物園の猿の島に行つて見なさい。自分だけうまい物を抱えこんで、

他を嘲っているエテモノがおる。

そして人間

民の心を持って心とする政治家が現れて来るまでは、人間族はオリの外で寒さにふるえながら、ケダモノの臭いに当てられぬように鼻をつまんでいる他になかろう。

(昭和二十六年十月二十九日朝刊)

ダイナマイトを食う

ダイナマイトを薄く切って酒の肴に食ったことがあるという土方が「格別うまくもないがシャリシャリして、一寸オツだ」といった。分量次第でダイナマイトも食料になる。

マグロ二貫目

マグロの刺身を飽きるほど食ってやろうと思って二貫目の土手を買ってきて、開いたとたん食う気を失った。その量ではマグロは胸くその悪い死体であった。

雑誌小説三十編

近頃の小説を軽蔑してそれから自由になるに三日間に雑誌小説を三十編つづけざまには読むのが最良の方法である事を発見したのは月評と言うのを始めてやらされた時だ。どんなに柔和な気持ちを持っていてもそれらの作者全部を踏みつぶしてやりたくなるものだ。

千個の原子爆弾

原子爆弾の製造競争がはげしくなり両勢力がそれぞれ千個以上ずつ所有することになったら、戦争の用具としての意味を失うに至るのではないかな。愚者の希望的な幻想だろうか。

物の質と量

物の質を人間の力で帰ることはできない。しかし量は変えられる。そして人間にとって適量にさえ置かれていれば人間を不幸になし得る質など何一つないのかも知れない。などと思いつながら、四％ばかりメチール混入のウイスキーを飲んでいる。

(昭和二十六年十一月五日朝刊)

ラジオ

先づ、何億もの人が、同一のことを、各地に居るままで聞ける。つぎに現にその言葉が言われ音が出されている最中にそれが聞かれている。それから、何をしゃべっても、聴衆から反対される事が絶対でない。——それがラジオだ。強力無残なること、専制君主または神に近い。

ラジオの支配層や関係者の性質や習慣が少しずつ専制君主に似てきやすいのは、そのためか。放送協会のことをインギン無礼だの薄謝協会だのと言うと、罰が当る。あれでよっぽど人間らしいから、まだあの程度であるところで、ラジオは全く「片だより」の道具である。向うはしゃべるだけで、こっちは聞くだけ。しかも神を信じさえしなければ神は「いない」と同様、スイッチの一ひねりで即座に「殺す」ことの出来るのがラジオだ。神もラジオも、そのまったく強力な

点において全く無力である。現代において最も莊嚴にして最も滑稽なものは、神とラジオだ。
(昭和二十六年十一月十二日朝刊)

寒い朝鮮

そろそろ朝鮮ではひどい寒さだろう。朝鮮の人たちが戦争のために家や家財を失ってふるえている事はニュース映画その他で大概の人は知っている。その中には朝鮮と縁故のあった人も多い。中には朝鮮人に助けてもらった人も多い。だのに、古着一枚ずつでも集めて南北朝鮮戦災者に平等無差別に送ろうといったふうな運動が一般に起きないのはどういふものだろう。

不意に日本人は不感症になったのか。自分のことで手一杯なのか。これがある人に話したら「たとえそんな事をして南鮮はともかく北鮮では受け付けまい」と言った。それなら北鮮のぶんは米軍飛行機に積んで行つてもらつて、落つことしてもらつて来たらどうか。まさか燃やしてしまいはせぬ、だれかが着るだろう。

北朝鮮の立場でもなくみな朝鮮の立場などでもない第三に立場が存立し得るか得ないかを論議したり、平和論や再軍備論を上下したりしているよりも案外そういうことをやって見る事の方が平和のために役立つかもしれないのではないか。少くとも私自身はそういう運動が起これば自分の数少ない衣料の中から一二枚を供出する能力と希望を持っている。これも樂園における患者の夢想到過ぎないのだろうか。

(昭和二十六年十一月十九日朝刊)

パチンコ談義

パチンコの悪口を書いてやろうと思い、それにはどんなものか知らないでは書けまいと思って、三、四回やって見た。

昔のコリントゲームをたてにしたぐけの大して面白くもないが、軽いスリルにギャンブルの味がある。少しもうけたり、少し損したりして、結局、遊戯代と思つてよい位の損をしたころあきてやめると言う程のもの。罪のない遊びだ。捨てて置けば、ひとしきり流行してまた次に移っていくだろう。

ほめる気にはなれないが、青筋立てて悪口を言う気はなくなった。

今の社会には、他にもこれと同じような事がだいぶある。はたから見て大害ありと思われるものが実はそれ自体は無邪気なことであつて、問題はそれにはまり込んで行く人間たちの浅はかさにあることが多い。パチンコぐらいに熱中して家庭悲劇を起す人間なら、石にけつまずいても起すだろう。それをはたから見ただけでイタケダカに悪口を言おうとしていた自分も浅はかだと言える。

池田蔵相が競輪やパチンコは、やめさせたいと言つたそうだが、そんな事よりも米の自由販売を公約したり、取り消したりして世間を騒がせ、主婦や農民を困らせた責任は感じているのだら

うか？ 感じているならパチンコをやめさせるよりも、蔵相を辞めるか辞めないかでも考えた方がよっぽど政治家らしい。

(昭和二十六年十一月二十六日朝刊)

服装哲学

現代のような乱世では、人を見るにも表面だけでは、どれが善人でどれが悪人だかわからないともいえるが、しかしまた人間は案外に正直なもので、見方次第で中身を全部さらけだしているともいえる。

「人、いずくんぞ隠さんや」だ。一例が服装である。

どんな職業の者に限らず、貴賤男女を問わず、頭のとっぺんから足のつま先まで新品づくめの日本人が歩いていたら、先づ悪党が歩いていていると思ってしまう。悪党とまではいかなくても、ヤミかサギかワイロかパンかチキか、とにかくカタギな御仁ではない。すくなくとも、私の場合に、この判断が狂った例はなかった。

服装のぜいたくすぎる女を高級P族または高級P族「的」であると思つてよいのと同様、身なりの良すぎる官公吏や政治家は、たいがい汚職官公吏や腐敗政治家だと思つてよさそうである。しかも、いずれも身なりがよくなり出しやころから、パン臭くなったり、汚れたり腐つたりしているから、正直なものだ。

銀座辺ををノシ歩いていている人間の中から、上から、下までにツギの一つも当たっていない服装をした男女を全部つかまえて調べたら、半分くらいは当人か当人の身边にイカガワシイ所の有るてあいであろう。

今の日本の国政に照らして一番無理のない、人間らしい、健康な服装をしているのは、労働中の「ニコヨン」の自由労働者ではないだろうか。

(昭和二十六年十二月三日朝刊)

B C G 論議

やれ有効だの有害だのと論議はまだ絶えないが、見ていると不思議でならぬ。一般のシロウトはとにかくとして、どうして専門医学者たちまたは医学施設の中から、もう一度科学的に調査実験してB C G接種の本体を究明し再確認しようと主張したり実行したりするものが現われないのだらう。それがされない限り論議は絶えないし、接種を強制するかしないか、いずれとも決められまい。そして、それが医学者の本務ではないのか。敗戦の四等国ともなれば、官公吏がワイロ屋になるが如く科学者は口説の徒に、なるか。助からぬは国民だけということになる。

チャタレイ判決

そう意地にならないで、平たく考えてみたらいかか？ 「チャタレイ夫人」を読んで実害を受

けた人が一人でもいたか？ 検事の基礎理由を肯定した証人たちの証言は全部、自分々の狭い道義観を展開したに過ぎないものばかりだ。忘れてはいけません。人類の半分は女ばかりだということでね。そして、それは、めでたい事であって怪しからん事ではないという事をね。

ホントに悪いことは言わないから、無罪にして「ただ今後少し遠慮したまえね」とぼんと肩をたたくいて、おしまいにしたらいかが？ そうでないと裁判官も検事も、後世から笑われますよ。愚者が予言する。愚者の予言も半分は当たる。

(昭和二十六年十二月十日朝刊)

民主主義雑考

民主主義とは、まだるっこいという主義である。

百人の人の意見がまとまるのを、機嫌よく待たねばならぬ。まだるっこい事にがまんできぬ者は民主主義を守れない。

民主主義とは、最初はなぐられるという主義である。個人間でも団体間でも、喧嘩となると民主的な方は急の間には合わないから、最初は必ずなぐられる。

専制主義の国と民主主義の国とが戦争すれば、最初は民主主義の国が負ける。

最初は負けるが、最後は勝つ。なぜなら専制国では真に戦うのは十人で、後の九十人は奴隷であり民主国では、いざとなれば百人ともが戦うから。

民主主義を大切だと思ふ者は、すべての紛争に最初は負けることを覚悟しなければならぬと同時に、最初の負けで根こそぎ亡びてしまわぬように、普段の地力を養って置かなければならない。民主主義方式を丸薬にしたようなものが日本にはある。それは柔道だ。正しく理解された柔道の方式は、日本の生み出した最も優れたもののひとつかもしれない。

(昭和二十六年十二月十七日朝刊)

批評について

どんな賢人がやっても完全に出来ないものが批評であり、どんな愚者がしてもある程度までやれるのが批評である。

したがって批評家というものは、どんな賢人にも出来ないことを、どんな愚者でもやれるようなかたちでしている者のことだ。だから、いくらかずつ神々しくない批評家はひとりもないし、またいくらかずつコツケイでない批評家は一人もない。

対象物が気に入ら取って食ってしまい、気に入らなかつたらソツポを向いてしまうのが一番の批評のしかたである。ただし、それでは専門批評家は成り立たない。なぜなら、取って食ってしまえば、対象物は自分の一部になってしまふし、ソツポをむけば対象物はないと同じになる。そして品物がなくては「商売」は成り立たない。だから専門批評家の批評は常に二流以下の批評だ。

百人いけば百通りの批評があるという事が民主主義である。だから民主主義とは、まずバベルの塔のようにやかましいという事だ。しかし百通りの声々の中から、最大公約数の声を生み出し得ないならば塔は亡びるだろう。

政治家になりそこなったものが政治批評家になったり、作家になりそこなった者が文芸批評家になったりするのには理由がある。そういう批評家の批評のバネは「復讐」心理があるから、それ自体としては一番しつこいが第三者から見れば、これほど空っぽなものもない。

最も恐ろしいも批評は、その事に直接の利害関係を持っていないソロウトがたゞ一語で下す批評である。

(昭和二十六年十二月二十四日朝刊)

齒について

幕末に下田に来たペルリが交渉相手の幕府代表に石けんを贈ったところ、役人たちはそれを取りかこんで評定した結果、どうやら食べ物らしいから、とにかく煮て見ようとあつて、大なべに入れて煮たら、たちまちアブクの山になってので、一同仰天したと言う話がある。

人はこの話を、未開国民の演じた笑劇として笑う。だが幕府役人は、とにかく煮て見るだけの慎重さを持っていた。敗戦後の日本人の中には、石けんをいきなりウのみに行っている者がある。もちろん下痢を起しているまだ起していない者は、これから起すだろう。

そういう人種は、永田町へんや丸の内かいわいや銀座辺、それから横浜や横須賀などにも多い。石けんの種類は、ピンは政治・経済・文化からキリは生活のマナー・性生活の様式にまで及んでいる。だから下痢の症状は悪性のもので、うっかりすると命取りになりかねない。

今度のは、敗戦国民が占領軍からあてがわれて食わされたものだから仕方がなかったのだと言う見方にも一理がある。しかし、そろそろ平和条約が発効して来るのだから、食わされたものを、もう一度反芻して見なくてはなるまいし、反芻してもよい時期だろう。そして何が栄養になり何が無用かを噛み分け選み取ればよい。

たゞ日本の今の政治家や経済人や文化人が、反芻するための丈夫な歯を持っているかどうか、すこし心細い。

(昭和二十八年十二月三十一日朝刊)

正月になって、伊勢神宮や明治神宮に参る人が非常に多いそうである。敗戦直後一、二年間そういう所に人が寄り付かなかったことを思い出す。寄り付かなかった現象も、「神風を吹かすこともできなかつたじゃないか」とハッキリ思つたためでもなかつたようだし、参り始めた現象も、神々への信仰が復活したためでもないように思われる。ただ何となく、あゝなったりこうなったりする。新しい着物ができて日本髪を結つたから、先づ明治神宮に参るといふ娘など、まだハッキリしている部類だろう。

大火事があつてすぐに元と同じように燃えやすい材料で、格別の防火設備もしないで、なんとなく家を建ててしまふ日本人。火事を忘れないわけではないが、だからといって特別のことをしようとするのでもない。

また、戦争の直接の、そして目に見えるギセイ者である傷病者たちが、生活に困つてふるえている姿を鼻の先に見ながら、公用族や社用族は平然と公金を浪費したり、東京温泉が繁盛したりする。それも傷病者に対してハッキリ責任を感じたり、同情したりしないためと言うのではない。じゃどうすればよいか、理づめに押し出されて来ないのである。

すべてが、何となく流されて行く。良くいえば悠々たる国がらとも言えようが、平和条約が効した後まで、たゞなんとなくあゝなったりこうなったりしていけば、国際政治の嵐に吹きまわられてボロクズ然たる国がらと相成るのだろう。

(昭和二十八年一月七日朝刊)

よその土地に行つて間もない頃、それはそれなりに、その土地のことがわかつたような気がするものだ。しばらく滞在していると、だんだんわからなくなる。次に永くそこに滞在していると、またわかってくる。もちろん、この第三のわかり方は第一のわかり方と似てはいるが、どこかまるで違う。人と付き合つて、その人を理解するということにも、これは当てはまるようだ。我々は、人や土地から受ける第一印象は尊重するわけにもは行かない。

この一二年、日本人の海外、特にアメリカ行きが盛んになったが、それらの帰国談には傾聴した方がよいだろうが、警戒もした方がよい。第一、現在は向うに行つて来るだけにバカバカしいほどの金がかかるのだが、今の日本人の中でそんな金を出せる人はどこかおかしい人間なのだ。そんな人間が日本の何十倍もの広さの、熱帯から寒帯まで広がった国を、ひどい速度でスーッとおりすぎてきただけだから。

また、敗戦後日本に來た外国人の日本および日本人観や、それに基づいた意見に、われわれは素直に傾聴しなければならぬが、やっぱり警戒もしなくてはなるまいそれらの外国人は選ばれた人々だから、一般の日本人よりも概して賢いが、しかしいくら賢い外国人でさえも三千年近く続いた日本と日本人を五年や六年で十分に理解し得るとは考えられないから。

ミソのうまさのわからない人も、ミソについて論じることが自由だ。しかしその人がミソ汁を作りはじめたら、氣を付けた方がよいということである。

(昭和二十七年一月十四日朝刊)

ちかごろのアメリカの識者で日本人の正直な意見を聞きたいと言う人が時々ある。私自身も私自身も先日ビーチさんという人から「アメリカが日本に対してした事で何が氣に入らないか正直に答えてくれ」と言われた。

誠実な質問だと思う。しかしこれに具体的に答えることは非常に困難だ。問題の種類によつては、ほとんど不可能である。それをビーチさんその他の質問者たちはわかつていられるだろうか。

われわれは今なお占領軍政下にある。敗者として勝者の絶対の意志のもとに立たされているのである。この場合の勝者は善意の勝者だから、敗者は比較的幸褔であることは事実だ。しかしその事に甘えて、独立国の国民であるかのような幻想を抱くほどわれわれはゴウマンではないと同時に、勝者の前で「正直ごっこ」を演じるほど卑屈にもなり得ない。

つまり、ナツパの上には石のおもしがのっているのだ。もちろん、それについて石が悪いのではないが、のっているのは事実だ。その下のナツパに、畑に生えている時と同じように微風にそよいで見ろと言っても無理です。

ビーチさんその他のアメリカの識者たちは、日本人が応えられるような条件の下に質問してほしい。

(昭和二十七年一月二十一日朝刊)

アチーヴメント・テスト

また少年少女がアチーヴメント・テストで悩まされる頃が来た。アチーヴメントは全科目を総合統一して生きた知恵にしようという教育方法で、以前の日本の義務教育にかなり欠けていたものだからそれ自体としては結構なものだ。しかしそれは主として教育するがわ、文部省や学校や教職員が十分に考慮して実施すればよい。教育される生徒の方はそれを素直に受け入れて能率を上げればよいことだ。

ところが、実情を見ると、アチーヴメントがまるで全科目から独立した特殊科目になってしまいい、しかもそれが選抜試験の場合に不当に重視されるために、生徒に粗笨な年鑑風な知識を奨励することになり、しかも三年かゝってコツコツ勉強したこと成果全体をわずか卅分か一時間で試験して当人の全能力を判定すると言った軽率かつ不公平を引き起こしたりしている。

アメリカなどが、どんなものを日本にあてがってくれても、日本の役人の手にかかると忽ちおかしなものになってしまふから妙だ。日本のこれまでの教育制度の中にも良い事はたくさんあったし、また必然性もあったのだ。戦後、六三三制を採用する際に、その事を熟慮したり主張したりした当局者があつたか？

少年少女が小さい頭を悩ましてウンウン言っている姿を見ると腹が立つてくる。文部大臣や文部省の役人や学校当局者こそ、先づ人間としてのアチーヴメント・テストを受ける必要があるのではないか。多分、たいがい落第するだろう。

(昭和二十七年一月二十八日朝刊)

あちらこちらでレジスタンスが語られ、再軍備是非が論じられているのに、ガンジイまたはガンジイ方式のことを思い出したり研究したりする人がないのは不思議である。

なぜなら、人類の歴史上、暴力によらざる民族自立の戦い、または軍備に依らざる国家の存立について、ガンジイ程筋道の通った、そして徹底したことを実行したものは他にいないからであ

る。ガンジイの主義と實踐の全部に賛成するしないは人それぞれ違うだろうが、今の時代にレジスタンス、再軍備、平和などについて真面目に考え抜こうとする者は、ガンジイを無視するわけには行かない。

これについての共産主義者の意見はすでにはつきりしているから、いまさら聞く必要はない。しかしそうでない平和論者たち例えば清水幾太郎や中野好夫やその他、平和宣言ないし再軍備反対を声明した思想家や科学者やそれらの団体の人たちの意見が聞きたい。それから、「戦争手段を永久に捨てる」と明記してある現行憲法の起草者及びそれに公然と賛成した代議士どもの意見が聞きたい。なかんずく、再軍備の事と言えば、あゝのこのと言葉のアヤトリのようなことを続けて、ひたすらしつぽをつかまれない事だけに努めているかに見える吉田茂の意見を聞きたい。皆さん、聞かせて下さい。愚者は愚者だからハッキリ聞かねば、わからないのだ。かつ諸氏は、それぞれ聞かせてくれる義務があり、われわれには聴く権利があると愚考する。

(昭和二十七年二月四日朝刊)

「教養」とは他へに「思いやり」のことである。他の人に身になって考えたり感じたりすることのできる能力のことだ。

ところで人は他人の身に実際上はなれない。想像してそれに近づくだけだ。だから教養とは想像力が豊かなことである。

吉田内閣は戦没遺族への補助金を「お燈明代」程度にしてしまった。それは、吉田や池田自身が生活に窮している戦没遺族でないためもあるが、実はそれだけのためではない。思いやりがないためだ。即ち想像力を極度に欠いているためである。父や夫や息子を戦争に奪われて、つらい暮らしをしている人たちの身に少しでもなれる人間なら同じく予算を減らすにしても、あれほど平然として、あれほどムザンに削りよめることは出来まい。

ちかごろ殺人事件が続出している。特色は、実に無造作にそれが、行われる点だろう。戦争の影響からの人命軽視のためもあるだろうが、やっぱり想像力の欠乏から来ているのではないか。他人から無造作に殺されることの恐ろしさやイヤさを一度でもマザマザと想像したことのある人間が他人を無造作に殺し得るはずはないからだ。

殺人は犯罪であって処刑されるもので、政治は選ばれた人のするものであって、感謝されてしめるべき事柄だろうから、比べるわけにも行くまい。しかし想像力即ち教養を欠いている点では、「お燈明代」一件での吉田内閣と、戦後は犯罪者とが、それほど違っているとは思えない。

(昭和二十七年二月十一日朝刊)

共通の広場

日本が再び反動化して行きそうな空気が濃いためであろう。あちこちで国民共通の広場の問題が論じられている。

問題はそれを作ることが出来るかどうかだ。論者の多くは出来ると言う意見らしい。私も出来ると思う。たゞ作り出すための困難さの度合いを論者たちは甘く見てはいはしまいか。インテリの間だけの広場づくりなら、まだそれほど困難ではないだろうがそれだけでは意味は少ないわけで、結局はインテリと大衆との共通の広場が出来なくてはホントの力にはなり得まいが、これが、ほとんど絶望に近くむずかしい。先づインテリと大衆との間に共通の言葉が、まだ打ち立てられていない。互いに言葉が通じないところに共通の広場など成り立つ道理がない。

もちろん、これについてはインテリに責任、というよりも罪がある。現に共通の広場の必要を主張している当のインテリの中に「日本人の教養の程度を考え合わせる」と言えばよい事を

「日本人の主体性の問題に関連させて考察すれば」などと言ってケロリとしている人などがいる。特に近頃の批評家たちの文章のわかりにくさ。わかりにくい文章を書くのが批評家の本分と思っ

ているゴウケツもあり、かくては共通の広場のヘソが茶をわかすだろう。

もし国民共通の広場を作ることが、日本に大きく役に立つことならば、むやみと分かりにくい文書を書いたり不必要な漢語や英語を乱用する者は、広場作りを妨害する者であるから、少し誇張して言えば国賊だ。

(昭和二十七年二月十八日朝刊)

つい先頃、国民倫理天皇中心論で、世論に蹴られた天野文相が、今度は高校で漢文を必修科目

にすると言いだしたらしい。漢文なくしては日本文化は不完全なものになる程のものだから、理由はなくはない考えである。しかしそれならば、先づこれまでどうして漢文を義務教育からぞいたのだ？ さらにまた、どうして漢字を制限したのだ？ それは別の文相のしたことと自分を知ったことではないなどと、よくある役人根性からの言い逃れをしてよい地位では文相という地位はあるまい。

漢文復活の是非をこゝで論ずる気はない。たゞ、もし漢字制限が全体として良い事であったとするならば、その逆の漢文をしようれいするような事は悪いことではないかと言っているまでである。われわれは、ヘラヘラと扇子で自分の額を叩いてお客の気に入られようとする茶坊主に賛成できないのと同時に、「背骨のある」ふりををしてお客に気に入られようとするムクレ茶坊主にも賛成できない。そんな連中に、あゝいじられたり、こゝいじられたりする事はごめんである。天野文相など、文教にそれほどの熱情を持っていたら、そんな事よりも先づ大学から高校中学小学などの教職員の月給を倍額にするための努力でもしたらどうだ？ 大学教授を人間らしく暮らせないほどの薄給に打ち捨てゝ置きながら、「漢文をやると精神の鍛錬になる」などとノダゴトを言っていると「衣食たりて礼節を知る」と言つた孔子さんがふきだしますよ。

(昭和二十七年二月二十五日朝刊)

「ニッポン日記」に書いてある事が事実とするならば、現行の憲法はアメリカ側で起草され、

日本側に当てがわれたものである。日本側の当局者たちはそれをウノミにしたのか噛んで食ったのかわからないが、賛成したのだから、日本側にも責任がある。しかし、食わせてくれたのはアメリカだ。

そしてこの憲法は良い憲法である。日本が武器を捨てる事をハッキリ明文にしてあるだけでもありがたい。こんな良いものを当てがってくれた事でアメリカにお礼を言わなければならぬし、言った。ところが憲法が実施されてわずか五、六年後の現在、何かの形で日本人に再び武器を取らせる必要が言われている。しかもそれがアメリカ側からも言われているらしい。するとこの点では、日本処理方針の上でアメリカはアメリカ自身に矛盾しつつあるのではないだろうか。五、六年の間に朝鮮事変その他、情勢が変わったからとも考えられるが、しかし日本に関する限り根本的には情勢は少しも変わっていないとも言える。いずれにせよ、再び武器を取らなければならぬとなると、先に武器を捨てることが出来たことについてアメリカに向ってのべたお礼の言葉が、とまどいしてしまうことになるのは致し方がない。それとも「ニッポン日記」の記事が嘘なのか。そのへんサッパリなつくが行かないのは、こちらが愚者であるせいだけだろうか。

(昭和二十七年三月三日朝刊)

アマゾン上流に住んでいる世界最未開の人種を探検した外国映画「裸族」を見ながら、文明人が幸福か未開人が幸福か、どっちだろうと思った。

解説によると、この種族の生態は現在の文明人の一万年前のそれに当るようで、彼らにとっての武器は弓矢と棒だけで、銃器を知らぬため、探検に行った文明人から棒などは取りあげるがピストルは取りあげない。見ていて大半の観客は笑った。

ところで弓矢や棒では一度の一人しか殺せない。ロケット砲や原子爆弾では、一度に千人万人が殺せる。場合によれば互いに敵国人のほとんど全部を亡ぼす事も出来そうだ。だから今後戦争が起きれば、それは人類による人類の皆殺し、つまり自殺になりかねない。そのような恐るべきカリカチュアを發明し、それによる戦争を断念しようとしないう「文明」がどういう資格で裸族を笑うのだろうか？ かつまた、その原子爆弾の世界最初の被爆者である日本人が、どういう理由で笑えるのだろうか？ かつまた、ロケット砲やロケット戦闘機や原子爆弾などに対しては、ちょうどピストルに対する弓矢や棒に等しいところの機銃やバズーカ砲などで「再武装」されつつある日本人が、どういう神経で笑えるのだろうか？

考えていたら、ヒョイと思ひ出した。公金五十万円を着服した汚職官吏が、主人の金五千円を使いこんで自殺した小僧さんを、あざ笑ったという話を。他の猿の尻の赤いのを笑っている猿の尻がもつと赤かったという光景である。

(昭和二十七年三月十日朝刊)

ラジオの「アメリカ便り」の坂井米夫がしばらく前にフラリと私を訪ねて来て、長年のアメリカ

カ暮らしから日本にきて人間が大きすぎるのに、ほとんど恐怖を感じるといった。日本人は三畳の室に七人で暮らしている家族のようなものだ。起きても寝ても互いのひじや足がつかえて、事毎にイライラして、大したわけもないのに喧嘩が起きたり、うまく行かぬ。だけならまだよいが、その隣室の二十畳の室に夫婦二人きりの家族が住んでいるとなると、うまく行かなさ加減が二重に深刻になるし、二家族間に紛争が起きやすい。そして紛争の種をまいたり直接、手を出したりするのは、まあ、三畳家族の方だろう。

第二次大戦へ突入して行った日本の動機の中には、基本的にはその事もあつたのではないだろうか？ もちろん、それを侵略戦という形で解決しようとした行き方が間違っていた事は明らかであり、そんなまちがいを今後くりかえすのはごめんだ。しかしこれについての合理的な解決策が考えられなければまたまた間違つたことが起こる危険はなくならぬ。

そして思ふ、三畳の七人家族は二十畳の二人家族に対して何かの発言権を持ち得ないものだろうか。アメリカやロシヤその他人口密度の低い国へ対して、日本ほど人口密度の高い国は何か発言し希望する資格はないのだろうか？ いずれにしろ平和問題はこの角度からも考えられる必要がある。

(昭和二十七年三月十七日朝刊)

いまの吉田内閣ほどインテリゲンチヤ全体から嫌われた内閣もすくなかつたらう。講和处理に

当面した時期も悪いとも言えるが、吉田政治の性格にも理由がある。することなすことナニワ節でいどのセンスで一貫している。問題はしかし、これほど嫌われながら吉田内閣が存続している点だ。

つまりインテリが、自分たちがこれほど嫌っているものを打ち倒し得ないでいるという事。打ち倒すべく国民大衆の意見をまとめあげ実力化することがインテリに出来ないという事だ。大衆から浮きあがった所で、大衆から理解されようのないヒステリックな火花を打ちあげている学者・批評家・文化人は多くても、先づ大衆に話しかける事から始めているインテリがほとんどいないのだから、それも当然か。

残念ながらこの点で最もかしこいのは共産党と新興宗教だ。ちゃんと大衆に話しかけ掴み共通の広場を持っている。われわれインテリは、いつまでたってもこれら狂信者にさえ劣っているらしい。

そういう事をも含めて考えて見ると、吉田内閣が倒れないのは、もしかすると、吉田内閣以上の内閣が出来ることは目下のところ望めないからではないか。つまり吉田は満足はしないがもつと怪しげな政治家にいじくられるよりはまだマシだと大衆が感じているためかも知れない。やりきれない事だが、日本は当分ナニワ節から逃れられないらしい。

(昭和二十七年三月二十四日朝刊)

先ごろある団体から、ヨーロッパに行かないかとすゝめられたが、行ってみたいと言う興味があまり起きないのに我ながらびつくりした。

主として物ぐさの性質のためだが、その他にヨーロッパのだんではないと言う気がした。中国や満州や朝鮮さえも私などわかつていない。

それよりも日本全国を歩いて見たい。ガタ自動車でも当てがってくれれば、いつでも行きたい。日本人の自分が日本をよく知らないのである。

間もなく平和条約が発効すれば、国内にかなりの混乱が起きることは予期しておかなくてはなるまいが、どんな動揺が来ても結局は日本の土台に足を置いて安定する以外になかろう。それには先ずその土台を具体的に、手で掴めるような形で知っていなくてはなるまい。それにはジカに見てまわる以外にない。

洋の東西を問わず、国が衰えた時にそれを再興しようと思った人が最初にしたのは、いつでもその国土を自分の足で歩きまわって見るということであった。日本再生の国民運動を起こすのなら、先づ多くの人々が全国行脚、ワンダア・フォーゲル、ユース・ホステルの類を実行することだ。吉田茂などという政治家が東京から大磯まで歩いてごらんなさい。ご自分の政治の間違っていることが一度でわかるから。

(昭和二十七年三月三十一日朝刊)

前から来る馬車にひかれまいとして夢中になって後へ後へ下がっている間に背後から来たトラックにひき殺された人がいる。

恐るべきものは恐れなければなるまいが、恐れ過ぎて誇張したりしていると、当の恐れているものとは真反対のものから恐ろしい目にあう。近頃「逆コース」への恐怖がインテリ間に盛んに言われているが、中には強直したのや誇張したものもあるようだ。「軍艦マーチ」を聞いただけで東條軍閥が今にも復活するように思ふのはコツケイな感傷である。

逆コースをたどって、元のモクアミになるのは絶対にイヤだ。しかし戦後他から命令された形であれだけ大きな革新が行われ、それを今講和発効と共に再整備しようとしているのだから、あちこちガタピシするのは当然である。事がらによつては元にもどるものもある。大事なことは元にもどるもどらないではなくてその事の是非にある。反対すべき事があれば、冷静勇敢に反対すればよい。それに、今の政治家がいくら愚かでも、東條軍閥時代を再現するほど愚かではなからうしそれをまた黙って見送っている程国民は盲目でもない。恐怖にのぼせあがつて、天井向いて「歌」ばかり歌っていると時によつて鼻の穴に鼠のクソがとびこんで来る。全体主義という鼠のクソが。

(昭和二十七年四月七日朝刊)

映画「羅生門」が外国で評判が良いのは実にうれしい事だ。すぐれた原作をよい監督が演出し

たためであるが、この場合注目しなければならぬことは芥川龍之介は外国人に読ませるために書いたものでなく、黒沢明も特に外国人に見せるために映画を作ったのでないという事だ。芥川は作家としての自然な興味に立って書いただけだし黒沢は映画人としての素直な意欲に立って書いただけだ。作品のどこにも「輸出用」のハンコが押してない。それが広い世界から理解され賞賛されたのである。それを思ふと喜びは二重になる。もちろん芥川も黒沢も、純粋な日本の性格を持ちながら世界のインテリゼンスの高さを身に着けている人たちである点が成功の原因だろうが、とにかく各個の本然の上にスパリと立っているきりで、周囲を見まわしたり注釈を付けたり噛みなおしたりはしていない。

これは他の諸文物を外国人に提供する際にも採用されてよい態度だろう。独善になつては良くないが、「理解されにくい」ことを恐れるの余り卑屈に陥ったり余計なインデックスを付け加えたりしないで、樹が自ら一人で立っているように在ればよい。外国人に理解してもらうだけのためにミソ汁の中にバタを入れたりはしない方がよい。

(昭和二十七年四月十四日朝刊)

ボシユコ三重奏団の演奏をよく言わなかった二三の新聞音楽批評家がある。それらの批評の当否は別として、日本人には世界が「一級品」のハンコを押してくれたものなら盲目的に尊重し、そうでないものの持っている味や価値にイコジに目をふさいでしまう習慣がある。ライカヤコン

タックスなどの高級カメラを日本人ほどたくさん持っている国民はないそうだし、ピカソやマチスに目の色を変えてしまつてボナールの良さを言うとは軽蔑したり、メニューヒンが来ると演奏を聞く前からウツトリしてしまつて、中には自分が幻想で作り上げた名器の音に泣き出したり、その他例は多すぎる。すべて「半未開」人種特有の劣等意識とアコガレ病から来る被サイミン術性のもたらすワザだ。

ボシユコを悪評した批評家の料簡の中には、たとえばベートーヴェンやモーツアルトの前ではひっくり返つて恐れうやまい、シューベルトやショパンなどは与しやすしとする「巨大愛好病」がもぐりこんでいるのではないか。もちろん巨大なものは貴い。しかしアヴェレツジなものも貴い、場合によつて「地の塩」はなお貴いように。そしてボシユコは音楽における地の塩のごときものを目指している楽団ではないのだろうか。

事は音楽や芸術の事に限らぬ。被サイミン術性から生まれた巨大愛好病は一種の英雄崇拜だからファシズムや全体主義から利用される危険を多分に含んでいる。現に、右と左の全体主義国を見るがよい。いずれも巨大なものだけが支配し、アヴェレツジなものはすべて抑えつけられている。

(昭和二十七年四月二十一日朝刊)

また東大で警官と学生の間で事件が起きた。真相を知らぬから論評はできないが、不思議に思

うのは東京だけでも幾十とある大学の中でこの種の事件がほとんど東大でばかり起きることだ。関西では京大がこれに当る。全国の大学の中で東大と京大の学生が最も「進歩的」であったり反抗的であったりするためだろうか？または昔からの「伝統」をマークして警察の方で特に弾圧するためだろうか？

いずれにせよ、最高の教養と理知が支配しているはずの場所で一番野ばんな事件が起きているのである。大学当局と学生代表と警察が話し合ってハッキリした協定を作るわけには行かないのだろうか。

局外者としてはこれ位なことしかいえないが、しかしちかごろ警官の態度が高圧的になって来たことは我々市民も現に知っている。二、三年前まではなかった「おいこら」などといわれる事も時々ある。して見ると東大事件でも非は警官側にあるかも知れないと思うようになるのもやむを得ない。まして、思想的にも、人格的にも柔和そのもののような渡辺一夫教授などまでが警官から身元調査されたりしてしているとあつては、少し気ちがいじみた話を聞くような気がする。お互いに貧乏で四等国民で十二歳で何も持っていないのだから、左右の全体主義国のことを「あれは警察国家だ」と悪口言う資格ぐらいは持っていたいものである。

(昭和二十七年四月二十八日朝刊)

爆薬をバラで綿の中にほうりこんでも爆発は起きない。鉄でくるんで火をつけるか岩に叩きつけるると爆発する。つまり爆発には堅い抵抗物と激しい圧力が必要だ。一トン爆弾を鉄の外側から取り出してバラにして綿に包んで水をかけて置けば、一トンの泥にひとしい。

暴力もそうである。暴力が暴力として成り立つたためにはそれを抑えつけようとする強い力を欠くことができない。共産主義による暴力革命などが成功する可能性は、社会主義化の進んだ英国などより右翼的な圧力が強いスペインの方が多いのではあるまいか。また、徳田球一を自由に追っばなして置けば、少しばかり口のうるさい天文学などに通じた好々爺なのに、地下にもぐらしてしまえば恐るべき革命指導者になる。

破防法をデッチあげようとしている吉田政府の反動性など、共産主義者にとって絶好の抵抗物で、ニトログリセリンにとっての撃鉄のようなもので、こんなありがたいものはないわけだろう。もし仮に今後、共産党が多少でも成功することがあるならば、それについての第一の功労者は吉田茂という事になるかも知れない。

(昭和二十七年五月十二日朝刊)

先日「東は東」という日米合作映画を見て不愉快だった。筋も陳腐すぎるし、作品としてもヤツツケが過ぎて、こんなものを新聞の映画批評家の多くがなぜ褒めたのか、その理由が分からぬまゝに、さては何かの利益でも食わされたのかと疑いたくなった位だ。

まず第一にヒロインの山口良子の人柄や演技がほとんど国籍不明だった。つぎに随所にデタラメがある。一例をあげると最初の部分のヒロインの祖父の家が外観は朝鮮家屋で内部は朝鮮とも日本ともつかぬもの。その室内で祖父が孫娘に求婚に来たアメリカ兵士の心を試す（？）ため、突いていた仕込杖をいきなり引っこ抜いて、手飼いの猿を殺そうとする。そして、こういう習慣が日本に在るような事を言う。見ていて顔から火が出そうになった。こんな習慣、またはこれに似た習慣が日本のどこにあるのだ？　そしてこの映画を見るアメリカ人やその他の外国人は、日本人はいまだにこんなに気ちがいじみた野蛮な人間かと思うにちがいない。

キング・ヴィダアという監督は向うでは一流の監督と聞いていたが、これで見るとやっぱりゲスなカツドウ屋だ。愚劣と言つては言いたらない。日本及び日本人を映画にする気なら、もうちょっと日本と日本人を知つてからにするがよい。少なくとももう少し調べたり観察したらどうだろう。アメリカと日本が今後ますます親密になる事は望ましいが、この映画に表れている右のような浅薄さは、両国民が樹立し得る親密さを大きくさまたげるものだ。

(昭和二十七年五月十九日朝刊)

インチキな見世物や、それに類する芝居はとにかくとして、現在、芝居らしい芝居で採算のとれているのは、ほとんど一つも無い。戦前には大体「七分で定が立つ」た。即ち七十パーセントの入りで収支がつぐのい、座員には月給が出せた。現在は百パーセントの入りでも全座員に食え

るだけの月給は出せない。

もっぱら客に受けるという事をねらって芝居をしている新派や新国劇でさえも、公演をしない月は給料を払っていないらしい。大どこの歌舞伎俳優なども月に二度ばかり赤坂へんに行って芸者の五人も呼んで騒げば、給料全部をすつても足が出るザマではないかと思う。芝居がミミツクなるのはあたりまえだろう。新劇でも公演がどんなにヒットしても給料は出ない。だから貧乏しているかと思うと左にあらず、映画や放送の出演でよい暮らしをして、それが芝居をしてはスツている。これで芝居そのものがおかしなものにならねば、ならぬ方がおかしい。

芝居の公演は、闇取引の一切出来ない仕事で、隅から隅まで丸見えだ。そいつへ十割の税。溺れかけた者の首に、石のおもしをかけるようなものだ。劇作家などに至っては既に水底に横たわってアブクもあげ得なくなっている。現に劇作一本で食っている劇作家は一人もいない。文化国家が聞いてあきれれる。この点では、四等国でなくて十八等国だろう。

(昭和二十七年五月二十六日朝刊)

この間へいの上に厚い板ガラスの破片のどがったのを一面に植えた家を見た。盗賊よけだろうが、異様なので、しばらく立って眺めていた。通る人は苦笑したり、わあ凄えやと言ったり、中には恐怖に近い表情で見て過ぎる。だいぶ金をもうけたんだね敗戦成金か、とつぶやくのもいるし、なあにアチラさんと要領よく組んで貯めこんだのさと言うのもある。見るもの全部が多少ず

つ盗賊と疑われるような、また挑戦されたような不快を感ずるようだ。

なるほど上をハダシで歩けば足を切るだろう。しかしがんじょうな靴をはいていれば渡れないことはなさそうだ。いずれにしろ、盗みに入ろうと決心した賊の意思をひるがえさせるための大した力になるうとは思われない。それほど賊を怖れるならば、もっと合理的なもつと信頼できる手段を取った方がよくはないか。

ガラスの刃の乱立を眺めながら私の頭は再軍備問題を考えていた。再軍備など、しないですめば、しないに越した事はない。しかしどうしてもする必要があるのであれば、それは合理的な実効あるものでなければなるまい。その点で、再軍備に反対するものと賛成するもの双方の主張の得失がわれわれになつとくの行く所までつくされたとはおもわれない。まして、国民の間に、これほど多数の反対者がいるのにほおかむりをしてすでにコソコソと実質上の——しかもそれは賊に對するガラスの破片程度の——再軍備を進めているらしい政府のやり方は下劣であると共に愚劣だ。

(昭和二十七年六月二日朝刊)

無抵抗で校庭に座っていた早大学生を警官が棒でなぐつて傷をおわせた先ごろの事件について何かハッキリした処置がとられるだろうと、書くのをひかえていたが、その後、島田総長と警視總監の間に手打ち式があつただけらしい。總監の方はそれでよいだろうが、総長の方が喧嘩両せ

いばい式の手打ちなどで満足するというのは、愚劣を通り越して、島田というのはニセモノの総長ではなからうかと思われた。早大生が抵抗しなかったのは偉い。その点、早大出身の私など卒業以来ほとんど始めて誇らしく感じた程である。その他の事件の全部にわたって新聞報道によってみるに、早大生側に非はないのだ。大学生大衆の威力を真に勇氣ある非暴力の形で示したのは立派だった。先ごろの東大における二、三の事件などに比べると雲泥の差だ。それを棒でなぐつて血を流させた警官たちの事を責任者は「少し元気が良すぎた」などと暗にはげますような事を言っている。これで世間が通るなら、世は闇だろう。

警察が民主主義国の警官としての誇りを少しでも持っているならば、誤りや行過ぎがあつたら陳謝してこそ立派であろう。大学当局や総長など、教育者のハシクレならば、バクチ打ちの親分のような手打ちなどしている暇に、理非曲直を明かにして断固として立つべきだ。でなければ、あなたがどんな立派なことを教壇から説いても学生は信用しませんよ。

(昭和二十七年六月九日朝刊)

鉄管のこちらの口から水を入れておきながら、向うの口から水が出てくると知らん顔をしたり困ったりする人がいたら変に見えるだろう。

日本のインテリの中には物の考え方や言い方ではマルクシズム方法によりながら共産黨員でない人が実に多い。政治や経済方面で発言している学者評論家の半数位はそうだ。中には共産主義

に正面から反対しながらマルクシズムは真理だと言ったりする者まである。変であると同時に、珍だ。

マルクシズムが真理なら実践すればよからうし、またそれによって考えたり言ったりしたのだらしたら、そこから生まれる結論にも責任を取ればよい。そう出来ないのならはその人のマルクシズムはニセモノだから捨てたがよい。そのいずれをもしないでいると、当人が「青白」くなるだけなら、自業自得というだけの話だが、好ましからざる勢力の「第五列」的役割をつとめることになりかねないからハタ迷惑だ。

現行の一致した左翼や右翼は普通世間で思っているほど有害なものではない。それにハッキリみとめられるから、好ましくなければよけて通ることが出来る。言行一致の左翼や右翼は、それとハッキリ見えないし、しかも大概「良心」と「愛国」を看板にしているため、国民の骨にからんで根こそぎ腐らせてしまう。「良心」と「愛国」の匂いがしたら眉毛にツバをつける支度をしなければならぬ時節になってきたから、忙しいわけだ。

(昭和二十七年六月十六日朝刊)

映画「お母さん」を見て感心した。

成瀬監督はカムバックした以上だ。昔のかれ自身を完全に越えている。俳優たちも皆良い。中でも田中絹代の好演は目ざましい。先に私は「宗方姉妹」の田中を醜悪だと評し、自分の年令相

応の役をした方が良いといったことがあるが、この映画で期せずしてそれが実現され成功している。しかも田中は年令に抵抗する必要が無く自然に演じているため美しく見える。私は先の批評を撤回することが出来るのがうれしい。

この映画のすぐれた点はいろいろあるが、中で最も優れており、まだ批評家が言わないでいる事がある。それは、このクリーニング屋一家を内側から描いて職業と生活の関係を真実に映画化し得ていることだ。クリーニング屋の仕事の苦しみと共に楽しみのようなもの——労働の頼もしさがリアルに描かれ、それが劇の中心にドッシリすえられている。こんな映画はこれまであまり無かったし、この事はチョット人が気づかない事であるだけに、監督の苦心は大変だったろうと思う。この点については、成瀬は他の一流監督たとえば、小津安二郎や黒沢明や今井正その他を、はるかに凌駕している。

だが、作品として傑れているだけに、見ていて今更のように日本庶民の生活の物悲しさをシミジミと感じたのも事実だ。それを成瀬が詠嘆するだけに終っているのは、やっぱり物たりなかつた。

(昭和二十七年六月二十三日朝刊)

そろそろ夏祭りが来るが、ここにもしワツシヨワツシヨとかつがれたミコシが村を一巡して宮に帰ると思っていたら宮を通り越して村役場に暴れこんで、そのへん中を叩きこわし、役場に火

をつけて燃してしまったというような事が起きたとしたらどうだろう？ かついでいた者の中に他を煽動することの巧みな者がいて、初めから村役場まで持ちこむ計画をしていたとする。他の多数はそれを知らず、たゞミコシをもんでいただけなので、役場が燃えるのを見て呆然とし、困惑したとする。

破防法や再軍備に反対するのは各自の自由で結構なことだが、現在のような暴動じみたデモの形を取るのが良い方法だろうか。共産党員にとってはこれでよいのかもしれない。党員でも同調者でもなくてデモに参加している多数の人たちの事だ。共産党員に導かれてワッシュヨワッシュと進んでいる自分たちの道がどこに通じているかを知っているのだろうか？ なぜなら主義としての立て前から言つて共産党は、破防法反対や再軍備反対が成功しても、そこで満足はしない。つまり宮で立ち止りはしない。必ず村役場まで行くものだからである。それを承知について行っているものなら、それもよからう。知らないでついて行っていると、そのうちに呆然として困惑するハメになるのではないか。共産党員ならざる人々の破防法反対運動は火炎ビン、石ころなどを含むデモ以外の方法によるのが理屈に合っているし、また、そのような方法はあるだろう。

(昭和二十七年七月一日夕刊)

ある新興宗教の信者たちの行列を見た。一人々々の首にジュズを下げ旗を立てて、声をそろえて祈念をとなえて進んでくる数百人の集団を眺めているうちにこれによく似たものがあつたよう

な気がして、なんだっけと考へたら、共産黨員に先導されたデモ隊の姿だった。ジュズこそ下げていないが一人々々思いつめたような眼をしてプラカードや赤旗を立て声をそろえてインターナショナルを歌っている。形だけでなく内容的にも似ている。両方ともある一つの事を強く信じているものは絶対に正しく、それ以外の一切のものは絶対にまちがっていると思っていて、その信仰のためには全く精力的に献身する。非常に熱心にシツコク未信者を引っぱりこみたがる。次ぎに、迫害されたり弾圧されたりするとますます信念は白熱化して、闘争力は高まる。

ただ一つちがつているのは信仰の対象だけだ。一方は教祖または教義で、一方はマルクシズムである。もつとも、新興宗教信者にとって教祖や教義の実体が何であるかという事が実は大した問題でないと同様に、共産黨員にとってマルクスの生みだしたマルクシズムと今現にソヴェトあたりで「修正」されて実施されているマルクシズムの関係がいかなるものであるかと言う事は問題ではないらしい。

ことわって置くが、新興宗教や共産党を軽蔑するために、こんな事を言い立てているのではない。もちろん、尊重するためでもない。私にはこの類似が「こわい」から言っているまでだ。

そして次にこの二つのものに似た第三の行列がある。それは狂人の行列だ。ウソだと思ったら大きな精神病院の飯どきだとか運動会などに行きあわせて見るとよい。形においても内容においても新興宗教や共産党の行列に実に似ている。いうまでもなくそれを眺めて「こわい」と思う氣持の中に「氣の毒だ」と思う氣持ちと「うらやましい」と思う氣持ちが混じっている点も三者共通である。

(昭和二十七年七月十二日夕刊)

「古橋選手がどんなに早く泳いだからって、あまり騒ぐな。ブリはもつと早く泳ぐよ」

全盛時代の古橋について或る毒舌家がそう言ったことがある。島国根性風のシンラツすぎる言方で必ずしも賛成はできないが、多少の理由がなくはない。

オリンピック・ゲームは国際的な祝典だから、明るくにぎやかなのは当然だが、それにしても日本人は騒ぎすぎる。国の内外に重要な問題や興味がひしめいているのに、新聞のほとんどが連日のように社会面をぶっこぬいてオリンピック記事を記している現象なぞ日本だけではないだろうか。またその騒ぎ方も「はしたまなこ」になりすぎる。しんけんが過ぎて直ぐに殺気立って来るのである。そのためにいらざるギセイ者が出たりすることになる。忘れてはいけない。スポーツは人々たがいを楽しみつゝする競技のことだ。勝った負けたは、その結果の一つにすぎない。

大体、外国では選手は（それが学生ならば）学業の暇々に練習するらしいが、日本では練習の暇々に学業をするようだ。それで優勝してもどうなるのだろうか。また外国ではスポーツを楽しむ民衆が多く、ピラミッドの頂点として選手が存在しているのに較べて、日本では選手は卓越個人で、選手を押し出し支えているピラミッドの内容は貧弱だ。

国民一般の生活水準が低過ぎて、スポーツを楽しんだり、それによって体位を向上させたりする余裕もない有様の中で無理な練習を積んで世界一早く泳げたり高く飛んだりできるごく少ない少数の個人が飛び出すのを、これほど期待したり、これほど喜んだり、つまりこれほど騒ぎ立て

るといふのはコッケイなだけでなくミジメな事だ。

(昭和二十七年七月二十日朝刊)

資本家の代表者たちが各大学の学長に向かって左翼学生は自分たちの会社では採用しないからと警告を發したという。かと思うと、ある会社では新社員を採用するのにスターリンの写真を

「踏絵」させたという噂まである。まあ、なんというバカバカしい、ミジメな事をする日本の資本家どもであろう。開いた口がふさがらない段ではない。既に職業的革命家化したり火炎ビンを投げたりしている少数の学生は論外だが、それ以外の学生が多少とも左傾するのは、ほとんど全部それらの学生が優秀で純真であることの証拠であつて、それ以外のなものでもない。今の世の中に生きて勉強していて、多少とも左翼的にならぬような学生は馬鹿であるかふまじめだ。そういう学生は将来何をやらしてもロクな事はやれない。それに、人間が一人前になるのに一度はハシカにかからねばならぬように、今の時代に一人前に社会人が出来あがるためには、一度は左傾してみなければならぬ。それが今の時代であり今の社会だ。中にはハシカで死ぬ子もあろうし、左傾しっぱなしになる者もあろうがそれは「やむを得ぬ損失」に過ぎない。

要は、それらに学生たちがその左翼思想を追及していった末に、どういう場所に出抜けるかという事、どういう堅実な結論に到達するかという事だ。

今となつては、もはや社会主義は常識であつて、どこの社会も実質上何かの形でかある程度ま

での社会主義化なしにはやっていけないのだから残るところは、それが全体主義的なものになるか自由主義的なものになるかの違いだけだろう。そのいずれかの結論を学生自身に生み出させたらいよいよ。左傾したものは雇わないとおどしたり踏絵をさせたりなどしていると、学生思想は「地下にもぐ」って骨がらみになり、とんだ時に社会的災害を引き起こす原因になるだろう。

早い話が、そんな馬鹿な事を言っている資本家や企業家自身、自分の学生時代を思い出して見なさい。現在あなたは有能な資本家や企業家ならば、ほとんど十が十、当時の一般学生の水準の中ではいくらかずつ左傾した学生であったはずだ。自分が昔食べてうまかった食べ物を、今息子たちが食べているのを取り上げたりするのは、みつともない事ですよ。

(昭和二十七年八月二十日夕刊)

電車やバスの座に座っている時に警官が乗り込んできて前に立つと、腰のピストルがこちらの目の高さに来る。どす黒い凶器だ。実弾もすぐわきに付いているようだし、バンドを外してケースから引き出せば、すぐにも人の四、五人は殺せそうだ。ひどく穏やかならぬ気持になるのである。

眼をあげて警官を見ると、たいがい戦争中の下士官などによくあった顔の、しかもそれが青黒くしように衰しているのが普通で、このピストルを正しく国民大衆のために使用または使用しないでくれるだろうとの安心感は来ない事の方が多い。事実また新聞で読んだり人から聞いたりする

話でも暴発したとか誤って人を殺したとか言うのが多くて、ピストルが直接大衆の治安を守った話
はほとんどないのである。

どうせ武器を持つなら威力ある武器という事になる理屈は分かるが、しかしそれにしてもピス
トルを警官に持たせるプラスとマイナスとが、日本の実情に照らして冷静に考究された結果では
なくて、日本指導者のアメリカ物真似かまたはアメリカ側の指示によるものらしい。私はこれを
甚だしく好まぬ者だ。凶悪犯人に対するとき以外は警棒だけでたくさんではなからうか。それ以
外に警官に与える必要のあるものは、現在の三倍くらいの教養と、同じく現在の二倍くらいの給
料だけだと愚考する。

(昭和二十七年八月十三日夕刊)

法律ことに国際法の事はよく知らないので法律論を振り回すつもりはない。また吉田茂が全体
どんな資格で向うの大使とどんな約束をしたのかも知らないのです、あくまでも局外者の感想でし
かない。英水兵強盗事件のことである。

日本駐留中の英水兵が駐留地以外の地域で日本人に対し強盗を働き、日本官憲につかまった。
事実は疑いようのないこととして自他ともに認めているようである。事件そのものが日本人にと
って不愉快にして不都合なことは言うまでもない。それに日本は法治国で法律があるし、それに、
確かまだ植民地でもなければ外人に対する治外法権もなかったと思う。してみればこの犯人を正

式な裁判にかけてさばこうとする事のどこがいけないのであろうか？ 私には英国政府の抗議の意味が分からない。

たぶん私が愚者であつて平凡な常識しか持っていないからかもしれないのだから、これを批判したりしたりする気はないが、重大な事からの意味がわからないのは、やっぱり困るし、それにこれが前例となつて外国人が日本で犯罪を犯す率がふえたりするにはイヤだから言うまでだ。

それとも、これは「泣く子と地頭には勝てない」と言ったような事だろうか。我々は無力な敗戦国民だ。そう思つてよいのか。そう思つてよければそう思つて我慢しよう。しかし表向き地頭の言うなりになればなるほど、腹の中で地頭を憎み軽蔑することもあり得ることだ。

バーナード・シヨウが生きていたら何と言つただろう。英国人の「ものの見方」の優秀さ（私自身も大体賛成であるところの）に敬礼している笠信太郎などのこの件についての意見を聞かせてもらえれば私など教えられること甚大だろうと思う。

（昭和二十七年八月二十六日夕刊）

東京都と警視庁とは、街頭の靴みがきを大幅に禁止することに乗り出しかけているそうである。理由としては主として市街地の美観を保つためという事にあるらしい。

事実とすれば、こんな腹の立つ悪政はない。バカもやすみやすみしたら、どうだ。全体、だれが好きこのんで道ばたに座つて僅かのもうけで人の靴をみがく商売をしていると思うのか。たい

がい、戦災や引揚げや失業その他の不幸で叩きのめされた人たちが、何とかして立ち直ろうとしてやむを得ず多くは一時的にしている仕事だ。敗戦後、どんなに多くの困窮者が、靴みがきで一時をしのいで来たかを考えて見るがよい。私の知人にもそんな人がいる。他に食べて行ける仕事を当てがった上でこの仕事を取り上げるなら話はわかるが、そうでないならば、人でなしのする事である。鑑札のあるなしなど問題ではない。

街の美観がそれほど大切ならば、チャンとした共同便所でも立てたらどうだ。ペカペカと醜悪な建物や看板などを禁止したらどうだ。下水工事や清掃作業をしつかりやったらどうだ。学校の裏の赤線区域などを禁止したらどうだ。

ニコヨンや靴みがきなど、カタギの日本人のしている仕事だぞ。そのために街の美観が害されるならば、その害されたちようどそのへんの所が敗戦日本の自然の姿なのだから醜でもなんでもない。

美観を言いたいならば、失業者に職を与える政治をしてから言いなさい。

気をつける、道ばたに座った靴みがきから見れば高級車に乗って走りすぎる連中（その何分の一は怪しげな事をして金や権力をつかんでいる）こそ醜悪にして都市の美観を害するものだ。

（昭和二十七年九月二日夕刊）

今度の総選挙は重大だ。国民が、不公正な選挙をした結果よくない政府ができてしまったら日

本はホントの亡国になり果てるだろう。

必要なことは一人々々が自分で判断し選ぶことである。それには人との約束をよく守るというのを標準にするのが一番たしかだ。立派そうな理屈を並べたり善さそうな態度をひけらかしたりは誰にもできる。実際に約束を守る事はホントに立派な人にしかできない。十だけ約束を守る人は十だけえらい人で、三つだけ約束を守る人は三つだけえらい。これが反比例したり、はずれる事は絶対にはないのである。

選挙演説などをあまり聞く必要はない。なにしろ当選したさの一心でどんな立派そうな事でも真顔になってブツのが候補者という動物だから。それよりも候補者のこれまでの身分上と政治的立場の経歴を調べて見ることだ。

戦前と戦後の身分と政治上の立場があまりにグラグラ変っている者は信用しない方がよろしい。なぜなら、政治家の身分上と政治的立場が五年十年と一貫している事は、その政治家が社会に向かつてしている政治的約束をよく守っているという事だからだ。

それから、これは妙な事を言うようだが、候補者の演説を聞く場合に、しゃべられている言葉の意味など全く顧慮しないで、その声そのものだけを心耳を澄まして聞いてみる事が案外に判断の役に立つものだ。言葉では人をごまかすことはできるが、声ではなかなかごまかせない。立派な人間は例外なしに立派な声を出すものだ。そして立派でない人間が立派な政治家になり得るはずはないのである。

(昭和二十七年九月十一日夕刊)

私事にわたるが、今どき珍しいことなので書かせてもらう。

目黒書店という出版社がたしか去年つぶれたが、そこから出していた雑誌「人間」に執筆した私の小さい作品の稿料が未払いになっていたのが、先頃その清算責任者から「すまないがその代りに社で出版した書籍を受取ってくれ」と数十冊の本を送って来た。いつも貧乏しているので、金の代りに本が来たのは迷惑ではないこともない。それに書店は言わばあたりまえの事をしたままでだ。しかし非常によい気持がした。社長がえらいのか「人間」の編集長がえらいのか、多分両方だろう。こんな責任感の強い人たちの社が成り立たなかったということに今更ながら腹が立った。同時に、そんなリチギなことでは当節つぶれるのは当然だとも思った。

敗戦後、私のようにあまり流行しない文筆業の者でも稿料や印税の未払いには悩まされている。流行作家などひどいらしい。中には三、四割の未払いを見込んでジャンジャン書きとぼしている向きもあるようだ。読者こそ迷惑だと言いたいのが、実はちかごろの読者は結構ジャンジャン派の小説などに満足しているらしいから、ケンカにはならぬ。

ただそんなありさまの中では、目黒書店のしたことが目立つというまでだ。特にほめあげる気はないが、われわれも、もういいかげんに文化の、教養のと言いついて立てることはやめにして、目黒書店程度の所から出直したらどうだろうと思う次第である。

(昭和二十七年九月十七日夕刊)

私は日米安保条約に全面的に賛成できない。また文化面や経済面や生活様式の面で日本がアメリカの植民地化することを好まぬ。またアメリカ人やアメリカ兵が傲慢なまたは非道な事をして日本の秩序と風俗をみだした場合には、これを黙許する気持ちにはなれない。

しかし、だからと言って、現在各界特に知識層の間に一般的に醸成されつつある反アメリカ的気分には私は賛成できない者である。占領以後アメリカの日本取り扱い方の中に、アメリカ自身のために日本を利用しようとする行き方が全くなかったとは言えないが、全部がそのような意図のみに発したものととは思われない。むしろその大部分が根本においてアメリカの善意に出たものであった。まず私の本能が私にそう思わせるし、次にその証明もある。

それには、占領当時の事を思い出してみるとよい。入ってきた進駐軍は日本人が怖れていたような乱暴はほとんどしなかったし、逆に食料その他で日本人を非常に助けてくれた。それは後で利用するための「宣伝工作」だけだと見るには余りに徹底した、素朴なものであった。これは現在でも失われていないと思う。一人一人のアメリカ人を必ずしも私は好かぬが、全体としてのアメリカ人の善意を疑えないのである。何となく人が良く鷹揚なのだ。これと、敗戦直後の満州におけるソ連兵の日本人に対する多くの無残な行動を思い出し、くらべて見たらどうだろう。

親米の目的のためにこんなことを言う気は私に全くない。日本に落とされた二つの原爆の記憶は私が親米的気分になることをさまたげる。しかしそれはそれとして、善意に対して感謝しないのは非礼で非人間的だと思うからこれを言う。

(昭和二十七年九月二十三日夕刊)

「秘史朝鮮戦争」(ストーン著)という本の表紙の帯に清水幾太郎が「朝鮮戦乱ぼつ発のその日から私は(何かがかくされている)という疑惑に悩まされつづけて来た。だが私の疑惑は正しかった。(中略)この本を読んで目が覚めないものを白痴というのであろう」と書いているので、シメタありがたいと思った。なぜなら朝鮮戦争ぼつ発の事情のことは私によくわからぬ点があり、それをわかりたいと思っており、そして自分のことをいくらか愚かではあるがまだ白痴というほどではなからうと思っっているからだ。

それで読んだ。そして非常に困った。清水幾太郎に「本書がはっきり告げてくれ」たほど、私には告げてくれなかったからである。

どういうわけか、ストーンは朝鮮戦争ぼつ発は全く、アメリカの反ソ指導者たちおよびその手先である南鮮政府の挑発またはその陰謀によるものであったという印象を作り出すために実に骨を折っている。しかもそれを彼は公表された公文書や新聞報道などを集め選み組み立てることによってしているので、一見すると大変公平で科学的な態度のように見える。ところが、よく読んでみると、彼はこれまでのアメリカ政府や国連側の発表が全部的に虚偽ではないかと言う疑いから出発して、演えき的にそれを証明しようとしていることが判る。この態度は公平でも科学的でもない。なぜなら公平さとは先入観を混えた疑いを排除することだし、科学的とは物事

の判断を帰納的にすることだからだ。土中から発掘した人骨の中から犬歯や尖った骨だけを拾い上げて人間とは非常に戦鬪的な猛獣だと断定されても納得はできまい。

われわれは、朝鮮戦争についてのアメリカ政府や国連軍側の発表が真実であるとの証明を持たないと同時に、この本を読んでも真実はその反対であるとも言い得なかった。つまり清水に言わせると「眼がさめなかつた」。私はやっぱり「白痴というのであろう」

(昭和二十七年十月八日夕刊)

民間放送ができてから俳優芸人はひどく景気が良い。本職の芝居の方が採算が取れなくなっているものだから、ちょうど埋め合せがついて結構だとも言えるが、一晚の中に同じ俳優の声が二つの放送から聞えたりすると妙な気がする。それに映画がある。中級以上の俳優だと映画一本十日間ばかりの出演で卅万円から百万近くなるらしい。放送も映画もむずかしいと言えばキリがなくむずかしい仕事であるが、やりよう次第でこんな優しいものはない。今の俳優芸人たちで本当に骨を折って放送や映画の仕事をしているのは、ほとんどいない。たいがい腹の中ではラジオとカツドウを馬鹿にしきっている。

しかし、いずれにせよ、芸を売って食っている者にジャンジャンとお座敷がかかる事なのだから道理にはずれてはいないし不快に感ずるのはまちがっていると思うのだが、やっぱり快くない。ややともすると「河原乞食」などという言葉が浮んでくる。私という人間が古くさいケツペキ性

を持った、つまり、まちがっているせいらしい。それにシット心もあるようだ。それこそサマジキ俳優たちがマイクやカメラの前で物真似をして法外な金を取っているのを見ると、焼けるんだね。まあ、闇屋になりそこねて学校の教師になった人間が、成功した闇屋を見て焼くのと似たようなものか。

助からないのは放送や映画だとも言えるが、なによくしたもので、たいがいのラジオ屋さんやカツドウ屋さん結構ありがたがっている。ただこのままだと放送や映画の文化性や芸術性が低下するのは、やむを得まい。

ここまで書いて、先日ある雑誌に「小説を五万枚書いた男」として丹羽文雄の写真が出ていたのを思い出した。するとヘコタレてしまった。俳優だけのことは言っておれない。われわれ文士も似たようなものである。丹羽文雄がこれまでに五万枚の小説を書きとばすためには、高校生の作文にもないような誤った文章や字句をウンと書いているなどと言つて見ても追っつかない。やっぱり、私の以上の言葉は、売れっ子芸者をお茶ひき芸者がそねんでケチをつけている現象だといわれてもしかたがないだろう。

(昭和二十七年十月十五日夕刊)

いつかこの欄で「進駐当初のアメリカの兵隊は日本人に対してほとんど乱暴はしなかった」と書いたら「自分の住んでいる地方ではアメリカ兵が乱暴した」と言つて事件の数字まで上げて抗

議文をよこした人があった。たぶんそれは真実であろうと思われた。私はその人がどうしてそのことを公表してくれないのだろうかと残念に思ったが、それとは別に、私は私の前言を取り消し得なかった。その人の地方ではアメリカ兵が相当乱暴を働いたにしても、日本全体にとっては、ごくわずかな率であると思っただからだ。しかし、とにかく現場に居合わせたその人よりも、直接見聞しなかった私の認識が甘いのは事実だろう。

そして思ふわれわれは、今の世間の色々の事件について知っていると思っているが、それはほとんど全部新聞やラジオなどのマス・コンミュニケーションによるものだ。マス・コンが公正であれば我々の判断も正しくあり得るが、マス・コンが不公正であればわれわれの判断は無限に誤って行く。そして現在はマス・コン自体がどんなに公正を心がけても、客観的には公正でない場合が非常に多い時代だ。すべてが既に大前提において第一の立場か第二の立場に立たされているからである。こんな時代に正しい判断を持ち第三の立場に立ちたいと思うならば、すべてに事件と情報についての最後の判断をできる限り引きのばすことだ。マス・コンの提供する報道のすべてを等価に置いて参考にしながら、そのいずれをも全的には信用しない事である。現代で真にかしこくなると言うことは、マス・コンの暴力の支配から自分を解き放って、自分自身の目と耳と頭で判断できる時が来るまで引きのばすか、または判断しないっぱなしで置く事だ。それでは不安で仕方がないと言う人にしただって、通りがかりのソバ屋でソバに青酸カリが入っているかいか判断しようなどとはしないで、なんの不安も感じないでソバを食っているのである。

(昭和二十七年十月二十二日夕刊)

総選挙で自由党が国会議席の過半数を取って再び吉田内閣ができた事は、国民の過半数がこれまでの吉田内閣の政治を是認したということである。平和条約や安保条約から破防法や保安隊のやり方に至るまでを国民の過半数が支持しているという事だ。これはほとんど信じられない程に絶望的な悲しいことであるが、事実である。悲しかろうと腹立たしかろうと、これが今のわが国民の程度だ。これをわれわれは認めなければならない。

自由党を支持した国民を軽蔑することはいつでも出来る。しかし、インテリがこぞってこれ程までに嫌った吉田内閣を好いている大衆がこれほど多数おり、そのインテリと大衆との間になんの懸け橋もないということ、そしてこれが共に国民であるという現状を軽蔑するわけには行かない。

民主主義とは、それがたとえ個人にとつて不服であっても、多数の決定には従うという主義だ。吉田政治がどんなに愚かしい誤った政治であったとしても当分われわれはこれに従わなければならない。その愚かしさや誤りがわれわれに耐えがたいものであるならば、我々は大衆の方を向いてその事を話しかけ、なっとくさせて、次の機会には自由党に投票しないように大衆を動かさなければならない。まだるっこい話だが、われわれが民主主義を最善の政治システムだと思うならば、それ以外の道はないし、あつてはならない。

要するに今度の総選挙はインテリの独善やゴウマンさがこつぴどく批判された事件であつた。インテリは再考三思して謙虚に反省すべきである。

もちろん、とは言っても、これはインテリ自身が今後正直に勇敢に吉田政治を攻撃することを手控える理由などには絶対にならぬ事だし、またそうであってはならないだろう。

(昭和二十七年十月二十九日夕刊)

そこらの電柱などに、この間の総選挙の時にはったビラが残っていて、その一つに「愛国者に投票しよう」と書いてある。なに党のビラだか知らないが目に入るたびに、おびやかされるような気がして怖くなる。愛国の声が国中に充満していた戦前と戦争中の事を思い出すのだ。

しかも現在は「愛国」の使用法が、あの頃よりも百倍も複雑怪奇なのだ。あの頃は主として右翼が使っていたが、今では左翼も使う。もちろん自由党も改進黨も社会党の右派も左派も使う。

ワイロを贈る商人も使うし、ワイロを取る役人も使うし、闇屋・ゴロツキなども使い、中には強盗が使う。もちろん愛国の意味はそれぞれにちがっているようだが、とにかく、あまりに使われるので、私のように右翼でも左翼でも自由党でも社会党でもワイロ屋でも闇屋でもゴロツキでも強盗でもない人間は、肩身が狭くてどこに座ればよいのか居場所が見つからない。

そこで考えた。私という日本人が日本を愛するということはどうなるか？ すると、それは今朝のミソ汁がうまかったと言う事だった。自分と家族と八千万の国民が朝ごと飲むミソ汁を守るためなら、私はいっしょうけんめいになれそうである。さては私という人間はよくよくミソ汁が好きだわいと思うと同時に、よっぼどの非国民らしいと気付いた。

ところが私と同じような人がほかにもたくさんいるらしい。そんな者だけで「非国民党」または「ミソシル国」を作ったらどうだろう。もちろんそこでは「愛国」という言葉は脅迫の道具で公安を害するのだから、使用を厳禁する。そしてもちろんミソ汁よりもスープの好きな人々には、スープの好きな人々には、スープのうまい国へ立ち去ってもらうことにする。

(昭和二十七年十一月五日朝刊)

「雲ながるる果て」という本を読んだ。戦没飛行予備学生の手記を集めたものである。編集者が自分の観点によって取捨選択したり解説したりしないで、ただ素直に手記そのものを並べてあるのが良い。それだけに全体に一種の「鈍い」感じがあるが、私にはその点がかえって二十二、三の青年たちの手記としては自然に思われて、「きけわだつみの声」を読んだ時よりも真実な感じがした。「きけわだつみ」の方は、どうも少し「出来すぎて」いた。

二十五歳で死んだ特攻隊員の「愛児への遺書」の中に「お前が大きくなって父に合いたい時は九段へいらっしやい」という言葉がある。二十二歳で散った隊員の最後の歌に「恋を知らず乙女を知らず一筋に、男の子わびしも国恋うわれは」というのがある。その他、ある意味では平凡ともいえる発想の仕方の文章や歌も多いが、今私は、これをただ平凡だと言い捨ててしまえないものを感じる。これらの中に今後の日本にとっても貴重なものが蔵されているのではないか。

「きけわだつみ」には、戦争に対して否定的な氣持を持ちながら、やむを得ず出征した学徒の

手記が多かった。「雲ながるる」には戦争を肯定した手記が多い。そのいずれもが真実であったのだ。当時における私自身の見聞と調査によればその数と度合いにおいて後者が多かったと思うがいずれにせよ、戦争を否定して出征した者もあつたし、同じ一人でもある時は否定したりある時は肯定したりしながら、そしてすべてがやむを得ず流されて行ったのである。二つの本は矛盾しているように見えるが実は二つながら真実なのである。真実というものが全体としてはこのようなものなのだ。

私は「きけわだつみ」と「雲ながるる」の二冊を机の上に並べて、これを一冊の本として見て、頭を下げる。

(昭和二十七年十一月十四日朝刊)

各新聞のページ数がふえていく傾向がある。それだけ国力が増したわけだろうし、文物が豊かになることだから、喜ばしくない事もないが、喜んでばかりはいられない面もあるようだ。

第一に紙面全体が水増しされて、ひどく水っぽくなって来た。悠々たる記事が増すのはまだよいが、お涙ちようだい式のセンチメンタル記事がふえたには閉口だ。ページ数がいくら増しても、新聞記者の数がそれほど増したという話は聞かないから無理はないが、政治欄の記事に妙な院外団ふうの気概ある文句がちりばめられたり、社会面の記事にナニワ節流のカンゼンチョウアクの殺し文句が散見したり、困い記事に少女歌劇式の「歌」が添えてあつたりするのも見苦しいし、

ムダだ。新聞によっては夕刊に少し腐ったトウフのような小説とウンと腐ったトウフのような小説を二つものせている。そんなスペースと金があるなら、昔の新聞にのった漱石や鷗外や長塚節の小説などに匹敵するような作品の一つや二つ、のせるように心がけたらどんなものだろう。

世間はますますいそがしくなる。新聞雑誌を一番読まなければならぬ人間には、ますます新聞雑誌を読んでいる暇はなくなる。だのに、その新聞雑誌のページ数は増して行く。これでは、しまいには、新聞を受取った途端に、その全部を紙くずかごにほうり込まなければならぬようになるだろう。誇張ではない。今のアメリカの実業家などは、それに近くなっている。そこでダイジェストが必要になる。そしてダイジェストなるものは結局は人間の文化と文物を致命的に貧血させてしまう道具だ。

うまい料理を作って、うまく食わせるためには、質のギンミが大切なのは言うまでもないが、量をひかえ目にすることも必要だろう。無制限な新聞の増ページ競争は新聞自身の自殺行為ではないだろうか。

(昭和二十七年十一月二十一日朝刊)

友人と私は喧嘩をした。しかけたのは私で、その動機はまちがっていた。喧嘩中に友人はひどい凶器を使った。喧嘩は私が負けて、私はあやまって、今後永くその友人と仲よくして行きたいと思っている。ところが友人は凶器をまだふところに持っている。軽率には出して使いはすまい

が、でも、彼がどういう理由でどんな気持ちになった時に使うかが、ハッキリわからないので、こちらは不安で、気を許してほんとに仲よくしてもらおうわけには行かない――

アメリカが日本と仲よくしてやってほしいとわれわれは望む。しかし望めば望むほどアメリカが持っている原子兵器が気になる。どんな時に、誰が、どんな機関がその使用を決定するのか？ それらを秘密またはアイマイにしておくことによって他国の戦意を威圧して行こうと言うのかも知れぬがそれで今後絶対に戦争が起らぬことになればありがたいが、それにしても不安は消えず、そして不安はさらに大きな戦争の原因にもなり得るものだ。

戦争中、広島と長崎に原爆を落とすことをアメリカの全国民が賛成したとは思われない。多分、アメリカ軍の統合本部と言ったような所で決定され、トルーマン大統領がサインをして、軍の専門部に命令が下されたのであると察しられる。今後も同様な手続きが取られるだろうか？ その場合アメリカ全国民の賛否はどうなるのだろうか？

原爆の数千倍の威力を持つという水爆の実験が成功したと言う。そして来年一月からは、トルーマン氏に代わって、大戦中アメリカ軍の首脳者の一人であったアイゼンハウアー氏が大統領になる。この機会に、今後どのような場合にだれがどんな手続きで原爆や水爆の使用を決定するかを、私もは知っておきたい。これは皮肉や悪意によるものではなくて、アメリカと仲よくして行きたいための善意から出た質問である。アメリカ人の中でどなたでもよいから、答えてくださる人はいないだろうか。

(昭和二十七年十一月二十八日朝刊)

そうですよ。君の言う通りです。地代と家賃をいっぺんに五割も引き上げるといふのはムチャですよ。それを今度の吉田内閣がやったのです。他の物価とのバランスを見て多少値上げになるのはやむを得ないかもしれないが。一挙に五割もあげなければならぬ根拠はない。思ふに結成早々の内閣は、先ず自由党の金箱である地主や資本家のご機嫌をとる必要があり、しかも自由党の地盤である地方農村は時代や家賃とは割に無関係になつていたので選挙の票数にはあまり関係ないと思つたためでしょう。おかげで都会地の勤労者や小市民など借家住いやわずかの土地を借りて自宅を立てたりしている者はひどい目にあわなければならぬ。私もその一人だし、君もその一人です。それだけでなく、怖いのは地代、家賃がこんなに上がるとそれにつれて諸物価がまたまた上がるという事です。と君は言います。

その通りですよ。しかしね、君はこの間の総選挙で自由党の候補者に投票したじゃありませんか。その結果自由党が多数を取つたため再び吉田内閣が出来て、その内閣が地代と家賃を法外にあげた。それを君が怒っているのだから、君は君自身のこと怒っているわけになります。すこしこりるがよいのです。

ところが君は、この次ぎの選挙のころになると、そんなことなどきれいに忘れてしまつて、またまた自由党に投票するのじゃないかな。吉田茂には背骨があるからたのもしいななど言つて君みたいな人が多いから日本の政治はよくなるらないのですよ。

野間宏の「真空地帯」を読んだ。真面目な意図の力作だが、面白くなくてどうにも読み通せない。それから椎名麟三の「邂逅」を読む。これも相当良い作品のようだが、読んでいるうちに頭がゴタゴタして、おもしろ味を消してしまふ。石川淳の小説がやっぱりそうだ。丹羽文雄や三島由紀夫の小説なども然り、作品の良しあしを問う手前で付いて行けなくなってしまう。私の古さのためか、または好みのせいかと思つたが、しかしそう思いきれないのは同じ空気の中で似かよつたセンスで仕事をしている大岡昇平や武田泰淳や永井龍雄や梅崎春生やきだ・みのるや久生十蘭などの作品はそれぞれ私にも面白く読めるのだ。

前のグループの人たちの文章には、観念と気分だけがあつて、ソリッド（固型性）なるものが欠けていて、後のグループの人たちの文章にはそれがあるためらしい。自分の心眼がハッキリ見たものを書いてるので、読む者もそれを通してイメージを見ることができるので。だから私の言うおもしろさとは、筋の変化ではなくて「ソリッドの喜び」のことである。その失われた所では、描写芸術は腐敗し亡びるだろう。

しかし野間や椎名や石川や丹羽や三島の愛読者もかなり多いらしい。それは今の読者の中に非常に観念的・気分的になつてきている者もあるということらしく、アヘン吸飲者がいるからアヘン業者がいるようなもので、それはそれとして一つの興味ある現象で無視することはできないが、小説は近代の生んだ大事な文物であるから大事にしなければならぬと言う見方から言えば、小説の

自壊作用をひき起こすようなソリッドを書いた文章は返上したいと言える。おもしろくないものが永續する道理はないからだ。

(昭和二十七年十二月十二日朝刊)

鹿地亘事件の真相はまだわれわれにはわからない。それは当局の手で明らかにされた上で適法に処理されるだろうし、されなければならぬ。

ただ、鹿地がスパイだったと言われだしてから「ああスパイだったのか、それなら監禁されるのも当然だ」と思い始めた人々がかなり多いようだが、これは問題だ。早まっではいけない。鹿地は憲法によって保障されている自分の基本的人権が侵された事を公けに訴えているのである。スパイであつたかなかつたかはこれからわかる事だ。かりにスパイであつたとしてもスパイを嫌悪する道徳はあり得ても、スパイを監禁してよいという法律は今の日本にはない。

第一に、スパイという言葉そのものが、現在の日本で成り立ち得るのだろうか。敵対関係のないところにスパイは存在しない。日本は今どこの国とも敵対していないのだ。外国人と交際して日本国内の諸事情を語り知らせることの、どこが悪いのだろうか？ もし悪いことがあるならば、当局はそれをわれわれ国民に納得させた上で、外国人と交際してはならぬという規律を制定しない。

今もし、金銭その他のために鹿地が、日本国内事情を秘密に外国人に知らせていた事が事実な

らば、日本人としての徳義と習慣の面から、われわれは彼を軽蔑するが、だからと言ってこの事は彼が公けに訴えている人権侵害が事実だとするならば、同胞の一人としての彼をわれわれが守ろうとすることをさまたげるものではない。

(昭和二十七年十二月二十七日朝刊)

底本.. 「三好十郎著作集 第四十六卷」 三好十郎著作刊行会 (代表者.. 大武正人)

1964 (昭和 39) 年 9 月 30 日 発行

初出.. 「読売新聞」

1951 (昭和 26) 年 10 月 1 日 ~ 1951 (昭和 27) 年 12 月 27 日

※上・下 二卷に分けました。

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成 23) 年 4 月 19 日